

## 深読みすると……

内藤 真理子

当クラブの読書会、今月の課題図書の一冊が『春は馬車に乗って』という題の横光利一の短編小説だった。

題からして楽しそうだ。その上、青空文庫にあるので早速読んでみた。

胸の病気で入院している妻と、看病している夫の話で、横光自身の経験と重なっている。

親の反対を押し切ってやっと結婚した二人は、その後嫁姑問題に苦しめられ、二年程で姑が亡くなると、すぐに妻が結核になり療養生活となった、という伏線が書かれている。

全般を通して会話体で書かれていて、そのほとんどが、病気になった妻の我儘な恨み節と、作家ならではの比喩を含んだ饒舌な反撃で、作者自身が辟易とした様子が綴られている。何だ、これは？

私は横光利一の本を初めて読んだので、検索をしてみた。

明治三十一年生まれ、昭和二十二年没で、彼は文学の神様とも小説の神様ともいわれていると書かれている。それを読んでから『春は馬車に……』をもう一度読みなおしてみたら、一回目とは全く違って読める。

海辺の病院で療養している妻。傍らにはいつも夫がいて、見るもの、感じることを話題に、何につけても喧嘩腰になり辟易していたはず。

だが、二度目に読むと、お互いに言葉尻を捉えてじゃれ合い、甘え、二人の睦言が書かれているとしか思えなくなった。同じものなのに……

そして、妻が亡くなる迄の大恋愛小説なのだと確信するに至った。

題名の意味は、春は馬車に乗って笑顔を持ってきてくれたのだろう。

私は不思議な気持ちになって、もっと読んでみたいと、偶々義父の蔵書にあった『寢園』（しんえん）を手にとった。昭和七年の発行の長編小説だ。

内容を簡単に書くと、バイ・ソサエティーの人々が織りなす、アバンチュール”なのだが、さすが文学の神様。『寢園』は、まさに純文学にして通俗小説で、情景描写、心理描写が巧み、なお且つ、推理小説を読むがごとく、次はどうなるかと、ハラハラしながら読み終えた。面白かった。読書会に感謝！